

真の国際学会を目指して

Toward Truly International Institute

国際委員会

委員長 秋葉重幸

1. ま え が き

2011年に制定された本会の理念は、

本会は、電子情報通信および関連する分野の国際学会として、学術の発展、産業の興隆並びに人材の育成を促進することにより、健全なコミュニケーション社会の形成と豊かな地球環境の維持向上に貢献します。

となっており、国際学会であることを冒頭に標ぼうしている。しかるに、ソサイエティや研究専門委員会などのこれまでの活動を見るに、ほとんどが日本における活動であり、国内学会の様相を色濃く残しているのは否めない。一方で、理念は学会の存在意義を示したものであることから、国際学会として広く認められる努力をしていく必要がある。ということで真の国際学会になるべく、国際委員会ではその取組みを本格化しつつあるところである。以下にその概要と今後の展望について述べる。

2. 国際学会とは

まず理念が標ぼうしている国際学会とはどういう学会か。すぐ頭に浮かぶのはIEEEだろう。米国が中心とはいえ、その会員・組織のネットワークはまさに全世界に及んでいる。学会の活動・ネットワークが多国間にまたがっているのが国際学会であるところとあえて定義しよう。しかも関わる国の数が多いほど国際化が進んでいるとしよう。本会はどうか。日本以外の活動拠点を海外セクションと呼んでいた（最近変更した）が、この呼び名は四方を海に囲まれた日本国内とそれ以外といった区別であり、いかにも日本中心の発想のように聞こえる。最近、これを国際セクションという名称に改めたが、各活動拠点の実態が変わったわけではない。望むらくはソサ

イエティや研究専門委員会の国際化である。長期的にはそうあるべきだと思うが時間がかかるだろう。まずは国際セクションの強化を図るのが先決というのが基本的な考え方である。

3. 国際セクションの強化

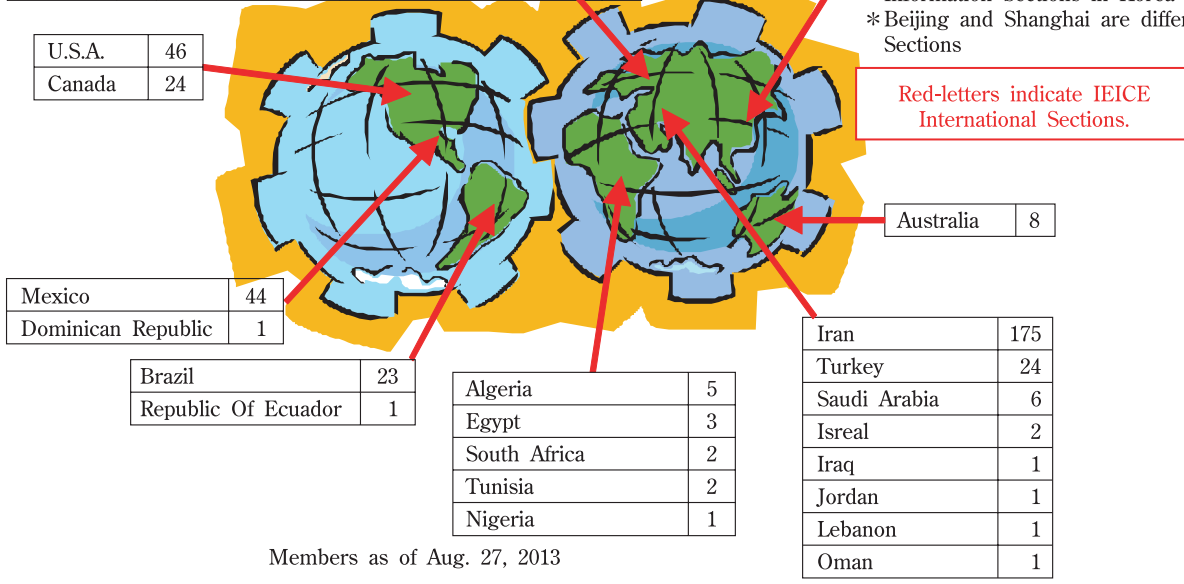
日本以外に居住する会員の分布を図1に示す。ほとんどの国・地域に分布しているが、国際セクションを構成できる程度にまとまった会員がいる地域は限られている。ヨーロッパでは多くの国に会員はいるが全体で一つのセクションとなっている。同図に示すように、現在のところ国際セクションの多くはアジアの国々に設立されている。国際化は当面国際セクションを中心に推進していくことになる。

日本におけるソサイエティや研究専門委員会の活動状況を顧みるに、総合大会やソサイエティ大会の予稿あるいは研究会の技報は日本語で書かれ、大会や研究会そのものも主に日本語で行われている。一方、論文は本会英文誌やIEEEをはじめとする海外の論文誌に投稿され英文の場合が多い。この方式は英語を母国語としていない国々の国際セクションでも有用ではないかと考えられる。つまり、各セクションにおける言語や文化的な独自要素を保持しつつ学会活動を国際レベルに広げていくという考え方である。もちろん英語の使用は奨励するが、各セクションの母国語で書かれた技術研究報告（技報）を基にその言語での研究会を開催することにより、討論の活性化や規模の拡大（会員数増大）を見込めるのではないと思われる。それらの技報はI-Discoverでアーカイブ化・出版を行うことにより、各セクションにおける利便性を高めると同時に、I-Discoverの新たな展開としても期待される。

また、本会の大きな特徴である研究専門委員会に相当

Spain	27	Switzerland	7	Bosnia And Herzegovina	1
Italy	12	U.K.	7	Croatia	1
Sweden	10	Portugal	6	Greece	1
France	8	Czech	5	Hungary	1
Germany	8	Ireland	3	Macedonia	1
Poland	8	Norway	3	Netherlands	1
Slovenia	8	Romania	3	Republic of cyprus	1
Belgium	7	Denmark	2	Russia	1
Finland	7	Montenegro	2		
Serbia	7				

Korea	1,128	Pakistan	33
Beijing, Shanghai	968	Vietnam	26
Taipei	450	Singapore	17
Bangkok	140	HongKong	6
Malaysia	108	Philippine	5
India	64	Bangladesh	1
Indonesia	36	Sri Lanka	1



Members as of Aug. 27, 2013

図1 会員の日本以外の分布状況

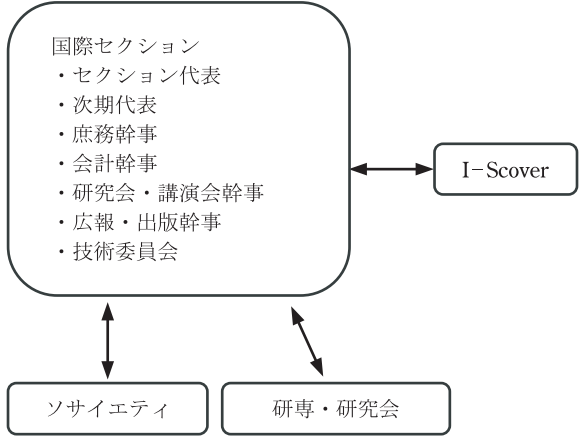


図2 国際セクションの組織構成

と考えられる。上述したソサイエティや研究専門委員会と連携を図る技術委員会並びに I-Scover との関係などを含めて国際セクションの組織構成案を図2に示した。各セクションの協力を得て可能なところから強化を図りたい。

4. 今後の国際化展望

IEEE は技術分野別の Society と世界の地域別の Region を中核組織として、更に細分化された Section や Chapter を縦横に張り巡らし、強固なグローバル展開を図っている。使われる言語は基本的に英語である。

一方の本会は理念で国際学会を標ぼうしているが、設立以来長年にわたって日本国内の学会という位置付けであったこともあり、一朝一夕に国際学会へと変わることは難しい。また IEEE と同じようなグローバル展開を目指すことも現実的ではない。そこで基本的な考え方としては、まず上述したように国際セクションの強化を図り、将来的には会員数が一定の規模になり独立採算も視野に入れられるような状況が実現することを期待するところである。国際セクションは国際会議の開催母体となることが可能で、機能的にはどちらかという特定の地

する技術委員会 (Technical Committee) を幾つか立ち上げて、そこをベースに現在のソサイエティや研究専門委員会との協力・連携を強化することによって活性化してはどうかと考えている。

国際セクションの組織については、セクション代表は置かれているが、そのほかの構成はセクションごとに異なっている。少なくとも代表、次期代表、各幹事は必要

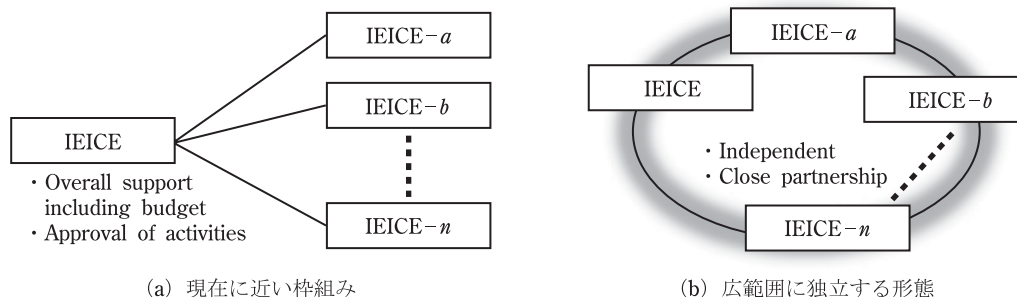


図3 今後の国際化の枠組み

域を活動拠点にするソサイエティあるいは研究専門委員会に近いことから、現状はともかくその可能性は十分にあると考えられる。では、そうなった場合の本会全体の国際的な組織構成はどんなものが望ましいであろうか。

図3は、国際委員会委員である山中直明編集理事の御助言を基に2013年3月の総合大会における国際セッション代表者会議で提案した枠組みである。

IEICE- a, b, \dots, n は現在の国際セッション、 a, b, \dots, n はセッション名にあたる。将来的に独立採算を視野に入れることやSectionという英文名が国内の支部にも用いられていることから、このような名称に発展的に変更した方がよいと考えられる。図3(a)は現在の枠組みに近い。会社組織で言えば親会社と子会社のイメージである。予算や事業計画を含めてIEICEの承認を得るとともに、財務を含めて全般的な支援を受ける。一方、(b)は財務面だけでなく広範囲に独立する形態である。航空会社のアライアンスのように緊密なパートナーシップの下に様々な場面で協力・支援を行う。IEICEというフラッグの下に一つの大きな国際学会として活動する。(a)、(b)いずれにおいても、図2に示すようにソサイエティや研究専門委員会の協力・国際連携が必須となることは言うまでもない。また、前述と少し重なるが、I-

Scoverは英語と日本語だけでなくほかの言語にも対応できる機能を持っているため、技術研究報告を現地語でデータベース化できる。したがって、技術研究報告を現地語で書いて現地語で発表しI-Scoverに収録するとともに、そこで得られたコメントや批判を基に修正し本会の英文論文誌に投稿するといったことも可能となる。前述の国際セッション代表者会議では、やや唐突な提案で説明時間も十分でなかったことから、戸惑いや批判の声が多かった。その後、関係の方々いろいろな場面でI-Scoverの紹介と併せて補足説明をして頂き、本会の国際化に向けた取組みに対して一定の理解が得られつつあると期待している。

理念の下に本会を継続発展させていく上でも国際化は待ったなしの施策である。I-Scoverの普及を図り、学術情報を広く本会に取り込み、その価値をいっそう高める観点からも重要である。学会が直面する財務的な観点を含めて上述のような施策について国際委員会では更に検討を進めていきたいと考えているが、会員の皆様からも率直な御意見を賜れば有り難いと思う次第である。

最後に本稿執筆に当たり山中直明編集理事（国際委員会委員兼務）から多くの有益な御助言やアイデアを頂いた。この場をお借りして厚く御礼を申し上げる。